

人生を拓く

⑤

村上 成幸さん(83)、信子さん(81) 北町3丁目

成幸さんは、徳島県出身の両親とともに、2歳の時東神楽町に。学校卒業後、1947(昭和22)年に旭川市内の写真店、川田商会(現カメラの川田)に勤めました。

当時は映像メディアの先端を担う花形の職業。プロの写真技師として自信を深め始めた27歳の時、信子さんとお見合い結婚しました。その後写真館産業の衰退で、45歳の時天人峡温泉・天人閣に運転手として再就職し定年まで勤めました。

車の運転が好きで、寝袋を積んで、2人でよくドライブに出掛け、道内の海岸線はすべて回ったそうです。「私のお抱え運転手だったよ」と信子さんは

当時を懐かしみます。

信子さんは、北海道ドレスメーカー旭川校を卒業後、洋服の勉強(当時)で夢だった洋裁師の仕事に。故五十嵐広三元旭川市長の奥さんのウェディングドレス縫製を任された



ことが勲章です。80人を束ねる主任として「旭川で一番の店になろう」と頑張っていました。

しかし、そのころから悪化した耳鳴りで、4回もの開頭手術を重ねました。視力も弱ってしまい、天職と決めた仕事も39歳で退職。6年前には軽い脳梗塞(こうそく)も発症しました。

何度となく辛く苦しい思いを経験してきました。大切な宝物だったミシンも手放してしまいました。

今はそんな当手を振り返る余裕も生まれ、自慢だった洋裁の腕は、リウマチを患っている成幸さんのために縫った手作りの特製本革ひざ当てに生きています。

「暖かいよ。このおかげでひざの手術をしないで済んだ」と話す成幸さん、「しよっちゅうけんかを売られて困ってるさ」と話す目元が、信子さんを優しく気遣っています。

俳句

みちのくの赤き林檎をあがなえり
老木の林檎ただただ「ありがとう」
りんご剥く仏の父も数に入れ
人だかり試食リングの津軽弁
秋の声しらかばの葉音の波にきく
蒼穹に赤い鉄骨原爆忌
妣想いあきずに眺む星月夜
りんごむく皮持ちて待つ孫のため
まるいざる残る暑さで梅を干す
りんご切りハートの蜜を食べつくす
初りんご野鳥に少しおすそ分け
林檎買う市場の隅の果物屋
日めくりの駆け去るごとき秋の草
戦後には貴重でありしリングかな
新蕎麦をすする響きに風渡る
熱の子も笑顔になつて擦りりんご
凜としてのうぜんかずらの艶やかさ
散歩道ふと甘匂ふ娘林檎
願かけて細く長くと林檎むく

長谷川 きみゑ
小林 ろぼ
高橋 公花
杉山 ひろのり
保科 なほ
徳光 吐苦
杉山 りつ
山口 佐知子
横田 則子
若田 久
高瀬 潤
石澤 清宏
澤田 久美子
松山 蓉子
三島 智
若田 郁
本田 咲
佐々木 里恵
山内 みゆ

